

緑谷出久の短編集的な

ミフカワ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

緑谷出久のあり得た可能性とかの短編を置いていく予定。文章を書く練習なので文にはそんなに期待はしないでください。

目次

かめはめ波的な	
かめはめ波的な1	1
ステータス的な	
ステータス的な1	10

かめはめ波的な
かめはめ波的な1

絶望。

緑谷出久の心中を表すにはその一言で十分だろう。

誰もが平等に与えられる筈の物を持ってなかった、それは少年にとって残酷な現実だった。

「…おかあさん。どんなに困ってる人でも笑顔で助けちゃうんだよ
…超カッコイイヒーローさ、僕もなれるかなあ」

「……ごめんねえ、ごめんね出久！」

違う、僕が聞きたかったのはその言葉ではない、そうじゃないんだ。
オールマイトが人々を救い出す動画を見ながら更に深い絶望感が心
の中に広がっていく。

その時再度見ていた動画が終わったのか、自動再生により次の動画
が再生された。

『落ちこぼれだって必死に努力すりゃエリートを超えることがある
かもよ?』

近年目に触れることもなくなった昔のアニメ、それがレトロアニメ
の名シーン集という題名の動画の冒頭でたった数秒流れた。最早一
部のマニアしか見ないようなその動画は確かにその瞬間一人の少年
を救ったのだ。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

その少年が中学二年生となった年まで時は流れる。

「えー、おまえらも三年ということだ！ 本格的に将来を考えてい
く時期だ！」

担任の教師がピラッと一枚進路希望の紙を手取る。

「今から進路希望の紙を配るが皆！ 大体ヒーロー科志望だよな」

そう言いながら教師は進路希望の紙を全て空中へと放り投げ、生徒

の殆どが個性を使用する。

重要な紙を放り投げたり個性の使用を咎めるのが緩かったり色々教師としてアウトである。

「せんせえー、皆とか一緒くたにすんなよ！俺はこんな没個性供と仲良く底辺なんざ行かねーよ」

その言葉に生徒たちがブーイングを起こすも爆豪勝己は特に気にした素振りもなく言葉を返す。そして教師が勝己が雄英高を志望してると言うと言徒たちはざわつき始める。

この辺りから何となく嫌な予感がしていた出久は机に頭を伏せて腕で隠すように頭を抱えた。

「あ、そいやあ緑谷も雄英志望だったな」

ほれみたことか、嫌な予感だけはよく当たるんだ。

先程までのざわつきの代わりに自身に寄せられる視線と訪れた静寂は一瞬にして嘲笑の嵐へと変わる。

「こらブエー！」

「わっ！」

目前に生まれた爆破を咄嗟に椅子の背もたれを掴み体を縦に回転して避け、後ろへと着地する。

「没個性どころか無個性のてめえが何で俺と同じ土俵に立てるんだ!?!」

その身のこなしを見て更に苛立ったように出久を見る勝己。

「…別に良いじゃないか、かつちゃん。小さい頃からの夢なんだそれ…やってみないとわかんないだろ？」

「なあにがやってみないとだ！記念受験か！てめえが何をやれるんだ!?!」

先程より更に勢いが増した敵顔である。ヒーローになったら確実に見た目ヴィランっぽいヒーローランキングの圏内に入るだろうなと思いつながらその場は無言で受け流した。

放課後

将来のためのヒーロー分析のノートを手に取りそそくさと帰ろう

とするとそのノートを上から掴まれた。

「…何すんだよかつちゃん」

「話まだ済んでねーぞデク」

周りを見ると取り巻きも一緒にいる。

勝己がノートを取ろうとするが中々ノートは出久の手から離れずに逆に出久が引つ張ってノートを取り返した。

それをみた勝己が信じられないような物を見たような目で出久を見る。

「…は？おいデク、おまえ何をした？」

勝己は掌から二ト口を出して爆破するという個性の関係上その腕には爆破に耐えうる強靱な筋肉が備わっている。その勝己が掴んだ物を取り返したという事はそれ即ち、爆豪勝己に無個性のデクが近しい力を持っているという事になる。

「何もしてないよ、それより話って？」

ノートのことがあったからか更に苛立ちながらも勝己が喋った事は要するに平凡な市立中学校から唯一の雄英合格者という箔をつけたいということだった。最後まで聞いてみみっちいと思つた自分は間違つてないと思う出久。

「つーわけで一応さ、雄英うけるなデク」

出久の肩に手をポンと置きながら最後にそう締めくくる勝己。幾分か喋っているうちに余裕が出てきた様で先ほどの様にあからさまに苛ついているといった様子ではなくなってきた。

「いや、受けるけど？」

「ああ!？」

が、この言葉により先程の様に苛つき始める、というか最早視線だけで人を殺せそうな勢いだ。

だがその視線を真っ向から見た上で出久は言葉を続ける。

「それにさ、さつきも言ったけど小さい頃からの夢なんだ」

「おいおい緑谷、夢じゃなくていい加減現実を見ろよ」

爆豪の取り巻きの一人が笑いながらそんなことを言うが出久は見もしないし気にも留めない、今彼が話するのは爆豪勝己なのだか

ら。

「——君に止められる程軽い夢じゃないんだ」

その言葉を聞いた勝己は今まで以上に怒気を放ちながら教室を出て行った。それを取り巻き達が慌てて追いかけて行くのを見てから出久はノートを鞆に入れて帰る支度をした。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼

ブツブツと独り言をしながらトンネルを歩く出久。

「今日は重りをつけて鍛えようかな、あと実戦をイメトレして……」
本来の時間軸であればただのヒーローオタクの糞ナードに特化していた側面がこの世界では修行オタク、或いは修行バカの方向にも振り分けられていた。

もちろん従来の通りヒーローオタクの気質も残っている。

「腕立て伏せを1万回と「Mサイズの……隠れミノ」……!」

背後に感じた嫌な気配に咄嗟に横へとステップを踏み、勢いそのままに上に行くために壁を蹴り流れるように天井を蹴ってヴィランの後ろへと着地する。

「身体強化か、良い個性だ……その体俺にくれよ」

日常の中に突如現れた悪意に足が竦み手が震える……などという事はなく出久はその頭と体をフル稼働させていた。

「すばしっこいやつだな、ますます気に入ったぞ」

「流動体……打撃は無効と見て良い、基本的には点の技は有効じゃないだろうし……拳圧で吹き飛ばすのがッ!」

ヘドロのようなヴィランの攻撃を回避しながら回っていた頭が対応策を思いついたと同時に何か巨大な力が凄まじいスピードで迫ってきてるのを感じた。

「(……下、下から何か来る!)」

修行により得た研ぎ澄まされた第六感、或いは直感力とも言えるものによりそれを出久が察知した時にはもう既にその巨大な力の持ち主はヘドロヴィランと出久の丁度真ん中にあつたマンホールの蓋を殴り上げ出久の目の前に現れた。

「もう大丈夫だ少年！」

「(オツ、オール……!!?)」

出久がその名を浮かべるよりも速く拳を引きマンホールから出て来た男はヘドロヴィランへと振り抜いていた。

「TEXAS……SMASH!!?」

ヘドロヴィランに向かって放たれたその一撃は、風圧でヘドロヴィランの体を吹き飛ばしその威力を衰えさせぬままトンネルの外へと突き抜けていった。

「は、はは」

あまりの威力に思わず笑ってしまう。これがNO。 1、平和の象徴と言われるオールマイトの力。

「さて、少年。怪我は無いかい？」

「だっ、大丈夫です！」

あたふたと、リュックに入ったノートにサインを書いてもらおうと取り出す出久。

「いやあ、すまないねオフだったのと慣れない土地で少し浮かれてしまったかな！　しかし、君のおかげで無事詰められた！」

会話をしながらもペットボトルにヴィランを詰め終わったオールマイト。ついでにいつの間にサインを書いたのか、ノートのページを開いた瞬間にはもう既にサインが書かれておりあまりの早技に出久はぎよつとした。

「じゃあ私はこれを警察に届けるので！　液晶越しにまた会おう！」

「えっ、もう……まだ」

「プロは常に敵か時間との戦いさ、それでは今後とも」

グツと跳ぶためにしゃがんだオールマイトの足にしがみつきオールマイトと共に空へと跳びたつた。

「離なさい、熱狂が過ぎるぞ!!?」

「す、すみません！でもどうしても直接聞きたいことがあって！」

「オーケーオーケー、わかったから目と口閉じな！」

一瞬で遠く離れた地面を下に見て、顔面に感じる風圧に堪えながら

なんとか出久は言葉を放った。

△▼△△▼△▼△△▼△▼△△▼△▼△△▼△▼△

「個性がなくても貴方みたいなのがヒーローになれますか！」

出久が喋っている中でオールマイトの体からは煙が上がり萎んでいく。

「恐れ知らずの笑顔で助けしてくれる最高のヒーローに僕も…おとおおおお？？」

「……」

「し、萎んでる、え！？ニセモノ…細！」

「私はオールマイトさ」

「ウソだー！」

吐血しながら痩躯の男性、オールマイトは言った。彼が言うにはプールで腹筋を力み続けているのと同じ感覚らしい。

「いや、でも亀仙人的な……一応あり得るのか？」

「見られたついでだ少年」

「へ？」

そして語られたのは五年前負った傷のこと、後遺症で今のヒーローとしての活動時間は三時間と言うことだった。

「とてもじゃ無いが、個性なしで成り立つとは言えないね」

「……それでも僕はヒーローに、「少年、夢を見るのも良いが相応に現実も見なくてはな」……」

人を助けることに憧れるなら警察官になるという手もある。そう言いながらオールマイトは下へ続く階段を降りていった。

「……まだまだ、まだ諦めるには早いぞ」

一人取り残された出久はそれでもまだヒーローになる事を諦めなかった。その時、出久の耳に爆発音が聞こえて来た。

△▼△△▼△▼△△▼△▼△△▼△▼△△▼△▼△

爆発音が聞こえて来た商店街へとやってきた。ヒーロー達の動きを見て学ぶ為の日課のようなものだった。

「(……あいつなんで!)」

その時出久の目に入ったのはヘドロヴィランとヘドロヴィランに捕まりながらも爆破で抵抗している幼馴染みの姿、そしてそれに爆破により近くへと近付けずにいるプロヒーロー達だった。

「(あいつ、オールマイトが捕まえた筈……落としたのか?　僕のせいで……)」

先程は自己防衛の為にヘドロヴィラン相手に立ち回ったが自分が襲われているわけでもないので何かが出来るはずはない。そしてオールマイトは……辺りを見回すと胸を押さえながら息苦しそうにしているガリガリの状態のオールマイトを見つけた。

「(僕のせいだ……プロヒーローは動けない、有利な個性を持ったヒーローが来るまで……ッ!)」

様々な思考が脳内を埋め尽くす中、捕らえられていた勝己の顔が目に入った瞬間、出久は駆け出していた。

「バカやろー止まれ!」

何故体が動いたのかは分からない、後ろからプロヒーロー達の声が聞こえるがそれを気にしている暇はない。対応策自体は先の戦いで出来ていた、実際に規格外(オールマイト)がそれをしている姿も見た。ならば後はそれを試すだけだ

「さっきのガキか……鬱陶しい!」

ヘドロヴィランへと駆けながら手を腰だめへと持っていく。

「(か……め……)」

「(デク!??)」

掌を球体を作るような形して身体中からそこへと力を集めていく。その間にもヘドロヴィランの攻撃や爆破が迫ってくるが横へと避けながらさらに力を溜めていく。

「(は……め……)」

その力をより近くで解放する為にヘドロヴィランの懐へと一瞬にして潜り込んだ。その速度は一時的にヘドロヴィランの視界から出久を消した、勿論懐に居る以上すぐにヴィランも気付いたが確かに出

来た一瞬の隙はその攻撃を放つには十分だった。

「このクソガキ「波あああ！」がっ！」

凄まじい速度を持って突き出された両手からは青白いエネルギー波が出てくる……筈がない。無個性である以上そういった明らかな異能が出久に使えるわけがない。

しかしその突き出された両手から生み出された突風、所謂拳圧によりほんの一部分、勝己の周囲のヘドロは吹き飛んでいた。とはいえまだ体の半分近くはヘドロに囚われている。

「かつちゃん、手を！」

「なんででてめえが……！」

出久は右腕を勝己に向かって伸ばした。かめはめ波（物理）の反動で殆ど腕に力が入らなくなった為勝己に掴んで貰わないと此処から助け出すことが出来ない。勝己も自身の周りのヘドロは吹き飛んだがそれは一時的なものですぐに元通りの状態になる事はなんとなく理解していた。それでもそう言わずにはいられなかった。

「君がっ！　助けを求める顔してた！」

既に勝己の周りのヘドロが戻り始めている。これ以上は話している時間も無いことを悟った出久が急かすと悪態を吐きながらも勝己はヘドロから解放され自由になった右手で出久の腕を掴んだ。

「クソがあっ！」

「ふざけるな……もう少しなんだから邪魔をするなあ！」

「無駄死にだ！　自殺志願かよ！」

あと少しで勝己の体が自由になるといったところでヴィランが渾身の一撃を放ってきた。それを見たプロヒーローのうちの誰かが叫ぶと同時にようやく周りのプロヒーロー達が動き出すが当然間に合うわけがなく思わず目を瞑った出久にヘドロヴィランの攻撃は直撃したかにみえた。

「……………？」

「君を諭しておいて……己が実践しないなんて……!!？」

いつまで経っても襲い来るはずの攻撃が来ないことを疑問に思い出久が目を開けるとそこには見上げる程の巨軀を持ったヒーロー、

オールマイトが攻撃を受け止めている姿があった。しかし、その体は至るところから煙が出ており吐血すらしているという酷い状態だ。

それでも、平和の象徴として、一人のヒーローとしての意志は微塵も衰えず寧ろ強くなっていた。二人の腕をオールマイトは掴んだ。

「プロはいつだって命懸け！ DETROIT SMASH！」

莫大な力をひめたその拳はヘッドロヴィランを吹き飛ばし、上昇気流を作り出して雨を降らせる程の威力を見せた。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼

「デク！」

プロヒーロー達の説教から解放されて家へ帰る途中で出久は呼び止められた。

「てめえに助けられてなんざいねえ、俺一人でもやれたんだ無個性のてめえが見下すんじゃないやねえよ、恩売ろうってのか？俺に……！」

クソナードが！」

そのまま踵を返して後ろへと帰っていったヘッドロヴィランに長時間拘束されていたのに元気な勝己を見た出久はただただタフネスの凄まじさに感心するばかりであった。

ステータス的な ステータス的な1

中学三年生の八月某日。雄英高校志望の受験生である緑谷出久は勉強を終えて布団の中へと体を潜らせていた。いつもならオールマイトが考案したトレーニングもあり直ぐに眠れるのだが、珍しく寝つきが悪かったためもう少し勉強でもしようかと目を開けた瞬間薄い水色の板状の物が目に飛び込んできた。

「へあつ!?」

驚きのあまりに変な声を出した出久。明らかな異物、このような物をインテリアとして買った覚えも無ければ部屋の中に入れた覚えもない。しかし、それよりも驚くべき事はその板に書かれている文字の内容であった。

緑谷 出久(15)

たいりよく13

ちから9

はやさ12

ぼうぎよ7

センス”2”

板や文字が光っているわけでもないのに暗い部屋の中でも妙にくつきりと見えたその文字に出久は既知感を覚えた。というよりRPGという部類のゲームをやった事がある人なら皆既知感を覚えるであろう。

「こ、これってゲームとかに出てくるステータス…?」

そう呟いた瞬間目の前から妙な存在感を示していた板が消えた。

先程まで考えていた勉強をしようという思考はさっぱり消え今出久の思考は目前に現れた板に関心が向いていた。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼

次の日、いつもより少々早い時間から海浜公園へと向かった。話したいことがあるのでオールマイルトにいつもより早めに来てもらえるよう連絡したのだ。海浜公園に近づくともう既にオールマイルトが来てるのが見える。

「待たせてすみません！」

「いや、私も今来た所だ少年！ それで話したい事って一体？」

「はい、実は……」

僕は恐らく個性が発現したこととどういいう個性なのかを伝えた。

「何だって?!? 個性がこの時期に発現……?」

そう言ったきり腕を組んでオールマイルトは何かを考え始めた。：た、確かにこの時期に新しい個性が出るなんて珍しい所か世界でも初めてかもしれないけどそんなに悩むことだろうか？

「緑谷少年、一つ聞ぐがその個性が出る前に怪しい人物と接触したりはしてないかい？」

「へ？ 別に怪しい人と会ったりはしてないですけど」

「となると本当に遅咲きの……」

その後も少し考え込んでいたがやがて結論が出たのだろうか、オールマイルトは顔を上げた。

「うん、取り敢えずその個性を見せてもらおうか！」

「はい！ ステータス」

その言葉に応えるようにステータスプレート（便宜上そう呼ぶことにした）が現れた。そこに示されている内容は昨日と何一つ変わっていない。

「これです、オールマイルト」

そう言っで見せるがオールマイルトは困惑している。……あれ？ これってもしかして

「すまないが私には何も見えてないな」

「そつ、そうですか……他人には見えない個性……いや、もしかして……」

思わずブツブツと個性の考察に入りそうになったが途中でオールマイトに止められた。

「す、すみませんつい癖で」

「H A H A H A、考えるのは良いことだが周りの事も見れるようにしなきゃなー!」

「はい……あ、そうだ一つ試したいことがあるんですけど」

「うん? 何だい?」

オールマイトの許可を貰ってステータスプレートがある場所まで右腕を動かしてもらった。

「おおつ、確かに見えないが何かあるようだ」

右腕にプレートの感触を覚えたのかそう言ってオールマイトはコンコンと叩いた。

どうやら他人には見えないだけで存在自体はする様だと特徴を一つ一つ覚えていく、気付いたらゴミ掃除の時間になっていたためオールマイトに声をかけステータスを消してゴミ掃除を始めた。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼

あれから一週間が経った。オールマイトと話し合っこの個性はワン・フォー・オールを受け継いだと同時に親に言う事にした。ステータスプレートの能力の一部と言えば『OFA』とオールマイトの個性との繋がりを考える人もいないだろう、そもそも一回個性が出たのにもう一回全く異なる個性が出るなんて冷静に考えてもおかしい。ステータスプレートの詳細も掴めてきた為、順を追ってノートに纏めた物を見返しながらステータスと呟く。するとノートの上に一週間前より幾分か小さいステータスプレートが出てきた。このプレートの大きさを換えられるようになったのは一重に一ヶ月間の研究成果だ。

緑谷 出久(15)

たよりよく15

ちから 11
はやさ 14
ぼうぎよ 9

センス” 2”

いまいち何を基準にしてるのかわからない数値ではあるが増えているということは少なくともトレーニングの効果は出ているということだろう。

「それにしても……このセンスって一体」

たいりよくやちから、はやさとぼうぎよは呼んで字の如く体力などを表している事は予測できるがセンスに関してはイマイチよくわからない。一つだけ他のステータスとは明らかに場所も違うし数字の表し方も”で囲まれている、明らかに特別な枠だ。一般的な解釈でいくと……感覚、或いは才能のことを指してる事になるけど……

出久が思考を纏めようとノートにペンで書こうとしたとき、手がノートの上に出していたプレートのセンスと書いてある所に当たった、次の瞬間ステータスの文字が今まで見た事のない内容になった。

- ・思考加速 ” 1”
- ・身体制御 ” 1”
- ・精神強化 ” 1”
- ・五感強化 ” 3”
- ・限界突破 ” 4”

センス” 2”

「……」

様子が変わったプレートに手に取ったペンを置き、かぶりつくように内容を見る。一通り内容を見てから考察を重ねていく。

「センスをタップするとこの内容に変わるのか、てつきり自分のス

テータスを確認するためだけの物だと思ってたから考えてなかったな。考えてみたらゲームとかでもステータス欄からスキルポイントを振るものが有るし全然ありえる事だったのに……」

ブツブツとオタクとしての気質を存分に活かしながら考えを纏めていく。

「となるとこの思考加速はセンスを1消費して得られる…スキルみたいな物なのかな?」

恐らく正解に近いであろう答えを導き出したので早速思考加速をタップする事にした。

本来ならばもう少し慎重になって考察を重ねていたのだろうが今まで持っていなかった個性の新しい面、そして先程まで勉強してた事で今の時刻は深夜になっており俗に言う深夜テンションも入り勢いそのままに思考加速をタップした。

するとプレートの変化は直ぐに起こった。

・思考加速

・身体制御 ” 1”

・精神強化 ” 1”

・五感強化 ” 3”

・限界突破 ” 4”

センス” 1”

恐らくこれで思考加速が使えるようになったのだろう。人生初、明らかに自身の身体に起こるであろう変化に興奮を隠しきれないまま思考加速を使おうとして——躓いた……どうやって使うんだコレ。

「思考加速↓」

……口に出して見たが変化は特に無し、ステータスプレートと同じ何かの行動によって発動すると思っていたけど違う? いや、多分何かの言葉、或いは行動がキーワードになってるのは間違いない。一体どんな言葉がキーワードで発動するんだ? それとも使うという意志が必要なのかな……?」

ブツブツブツブツと途中から口に出しながら数分程考察を重ねていくが結局使えそうには無かったので寝る準備をする為にベッドへ向かおうと椅子から立ち上がろうとして違和感を感じた。

「……う？ 体が重い、というかなんか動きにくい気が」

僅かに覚えた違和感は一度感じるとより一層強い違和感として襲ってくる。

「いや……明らかに体が動かしにくい、というより追いついてこない？ もしかして……『思考加速』」

そう眩くと違和感はずつかり無くなり体が思うように動き始めた。僅かに感じた違和感と先程までやっていた行為を考えれば即座に何が起こっているのかは理解出来た。思考加速が発動してるが故に意識と体の認識が合わず齟齬が生まれていたのだろう。

「にしても何というか……」

『地味』、この一言に収束されるのは致し方ないといえよう。出久が想像してたのはもつと劇的な、それこそ1秒が10秒に感じられるほどの思考加速であったが実際には1秒が1.2秒に伸びた程度であったのだから。

……まあ期待しすぎたのかもしれないと思いながら今度こそ出久は眠りについた。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△

10ヶ月間地獄のような特訓を経て遂にここへとやってきた、雄英だ。朝一番に食べたオールマイトの髪の毛のことを考えながら歩いていると後ろから声が聞こえた。

「どけデクー！」

「か、かっちゃんー！」

そう言つて苛立ったようにデクの横を通つていく勝己。その後も転びかけたり（女子と話したり）メガネの男子に注意されたりと様々な目にあつたが何とか試験会場にたどり着いた出久。

「（あ、あの人、さっきの）」

「その女子は精神統一を図っているんじゃないか？」

そして転びかけたときに助けてもらった女子にお礼を言おうとしたところをメガネ男子に止められ二度目の注意を受けている時に試験が始まった。

『はいスタートー!』

「……ん?」

『どうしたあ! 実戦じゃカウントなんかないんだよ! 走れ走れえ! もう賽は投げられてんぞ!』

その言葉を聞くや否や出久の周りにいた受験者たちは既に走り始めており、気付いた時には出久のみが出遅れる形となっていた。

「(ま、まずい出遅れた!) 『思考加速』!」

即座に思考加速を使用しその後を追う。普段から思考加速時の違和感に慣れるために使っていたので初めて使用した時より違和感がほんの少し軽減した身体と加速した思考により出久は多少の余裕を持つことが出来た、しかしその余裕は一瞬にしてかき消された。

「……1P!」

『標的捕捉! ブツ殺す!』

目の前に突如仮装ヴィランが現れた。すぐさま攻撃しようとするも出久の脚はガタガタ震えて動けずにそのまま——仮装ヴィランは横から放たれたレーザーに貫かれた。

「メルスイ、いいチームプレイが出来たね、でも君とはもう会うことはなさそうだ」

「二度とって……」

『あと6分2秒〜!』

そう言いながら去っていく受験者に何か思う前に残り時間が告げられた。

「(まずい、まずいまずいまずい。)」

「ふ〜28P」

「45P!」

ドンドン増えていく受験者のPとは裏腹に減っていくヴィランの数、出久は焦りに焦って……切り札を切る事にした。

『『思考加速』ッ!』

センスは複数を同時に扱うことは不可能な為思考加速を解除、代わりに使うセンスは――

『身体制御』

その言葉を口にした瞬間明らかに体が動かしやすくなったのを感じた。その状態で個性を使う。

『ワン・フォー・オール』ツ！』

出久の身体の周りをバチリと緑色の閃光が散った。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼

雄英へと向かう地下鉄の中、出久は最後の確認にとステータスを開いた。

「ステータス」

緑谷 出久(15)

たいりよく42

ちから30

はやさ37

ぼうぎよ29

センス”1”

個性「力をストックする個性」

「個性を与える個性」

最初は個性が二つ書かれている事に驚いたがどういう仕組みか理解すればそれ程驚くような事でもないようだ……個性を与える個性で二つの個性を次の継承者へと継承していったのだろうか、どうして二つの個性が一つの個性として扱われる様になったのかはわからないが。

雄英へと向かう地下鉄の中で出久は朝のオールマイトの話を聞いてから思考加速を選んで以来全く触れていなかったセンスに久方ぶ

りに触れた。

・思考加速

・身体制御 ” 1”

・精神強化 ” 1”

・五感強化 ” 3”

・限界突破 ” 4”

センス” 1”

あの時とセンスの値は変わっていない、恐らくこの値は生まれた時からの先天的な者でこれからも増える事はない可能性が高かった。よってこのセンスを振り分けられるのは『身体制御』か『精神強化』のみになる。

「(個性を渡された時、オールマイトは言っていた、あくまで僕の体は急造品、100%の個性を使った時の肉体への反動は覚悟しておけと)」

なら、ならばだ、自分の体に合った出力で使えば壊れない筈だ。

個性というのは身体能力の延長線上に位置する物であるというのは今時小学生でも知っている事だ。氷を出す個性、爆破を起こす個性も全てが身体能力の延長線上である。

ということはだ、身体制御を使えば個性を制御出来るのではないか？ そして出久は身体制御をタップし地下鉄に乗ってる最中に複数同時にセンスを使えるのか、身体制御の使い心地の二つを確かめた。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼

流星に公共の場で『OFA』を使うわけにも行かないのでこの試験会場でのぶつつけ本番であった。とてもじゃないが切り札なんて言えない、そもそも個性とセンスを同時に使えるのかは未知数。仮に使えたとして思考加速を一番最初に使ったことを考えてみると上手くOFAを制御できるかも分からない。

それでも何も出来ずにOPのまま試験不合格よりは遥かに試す価値

値のある物だった。そしてその結果は――

大きく振りかぶって突き出した拳は2Pの仮想ヴィランの胴体を貫いた。基板がショートしたのか爆発して粉々になった2Pを横目に次なる仮装ヴィランを探しに緑の閃光が動き始めた。

「これで10P……!」

――予想以上の結果を生み出していた。センスの身体制御を全て個性を制御するために使っているからか無駄な動きが目立つがそれでも先程までを遥かに凌駕する動きを緑谷出久にもたらししていた。

しかし、いつまでその状態が持つか分からない、身体制御を持っても完全には制御しきれずにほんの僅かに許容量を超えて痛みを発することがある。出久としてはなるべく早めに合格ラインまでポイントを稼ぎたいところではある。

「(恐らく全体の出力の1割以下……いや、5%も引き出せてないけどそれでも)りやあつ!」

3Pが目に入った瞬間には何か言葉を発する暇もなくキャタピラを破壊され行動不能になる、そうなれば後は胴体を狙って殴るだけで戦闘不能になった。

全体の内の5%未満、数字で見ると恐ろしく小さいがそれでもこの試験程度ならばなんとかなる程の力を『OFA』は秘めていた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

暗闇の中で十数名の教師達が受験生達の様子を見ていた。その中にはこの春から教師になる予定のオールマイトも居たが、緑色のイナズマを纏いながら仮想ヴィランを倒している出久を見てその胸中は驚きに包まれていた。

「(この短期間でOFAを制御出来るように……!??) 私も最初は0か100のどちらかでしか扱えなかったというのに……)」

オールマイトはOFAが譲渡される前から既に器が出来上がっていた為100%に耐え得ることもできたが制御出来ていたかというところという訳ではない。徐々に慣れていくうちに力を100%を維持、20%を維持、30%を維持するなど制御出来るようになっていったのだ。故に初見で自分の限界ギリギリを見極め、ある程度は使えて

いる（様に見える）出久に対する驚きは大きかった。

そして、教師の中に紛れた一際小柄なネズミが言葉を発した。

「この入試は敵の総数も配置も伝えてない、限られた時間と広大な敷地そこから炙り出されるのさ。情報力、機動力、判断力、そして純然たる戦闘力：市井の平和を守る為の基礎能力がP数という形でね」それに続いて教師達も今年の受験生に対する言葉を口にする。

「今年の中々豊作じゃないか？」

「いやーまだ分からんよ」

「真価を問われるのはこれからさ」

ポチリとスイッチが押された。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼

何処からともなく破壊の音が聞こえてきた。

「なっ、なんだ、あれ……」

そう呟いた出久の目の前には圧倒的な破壊と暴力があった。

モニター越しに『お邪魔敵』として配置したOPの暴れっぷりを見ながらネズミは言った。

「圧倒的脅威、それを見た人間の行動は正直さ」

事実その通りであった。受験生のうちの大半はお邪魔敵から背を向け破壊から逃れようと必死になって離れていく姿が写っていた。そしてまた、緑谷出久もそのうちの一人であった。

幾ら『OFA』を多少扱えるようになったとは言え緑谷出久はビビリ癖がある為、お邪魔敵というギミックに驚き腰を抜かした。そしてOPから離れようと腰を抜かしながら必死に逃げようとしている時に後ろから声が聞こえた。

「シヤレにならんっ、逃げなきゃ逃げつつポイントを、まだ10Pだ！ 無駄になっちゃう、オールマイトがくれた全部無駄に……ッ！」

「いったあ……」

「(……この声、さっきの)」

後ろを見るとそこには雄英高校の校門で転びかけた時に助けられた女子が瓦礫に脚が挟まったのか動けずにいる。その様子を見た出久は即座に助けに行こうとするが

「(瓦礫をどかす…いや、間に合わないか!)」

瓦礫をどかす事自体はOFAを使えば出来るだろう。しかしいつ暴発するか分からない爆弾を抱えたままあの女子の脚の怪我を気にしつつ離脱するなどといった芸当は今の出久には出来なかった。あのお邪魔ヴィランのスピードから人間一人を背負って離脱するにはOFAを使わざるを得ないが個性の制御を間違えたら抱えた女子ごと吹き飛ぶ事は間違いない。

故に取るべき選択は一つに絞られた。

「はあっ……ハアツ」

息を切らしながら先程までとは違い限界を超えた力を使用してヴィランへと走り出す。OFAの全体の1割程の力は使えているだろうか。そしてそのまま脚へと100%のOFAを集中させ

出久は跳んだ。その身体は重力から解き放たれたかの様にOPヴィランの顔の近くと突き進む。

個性の制御にフルに回していた『身体制御』を通常の状態へと戻してパンチを放つ為の体勢へ入る。

「(ケツの穴グツと引き締めて心の中でこう叫べ!)」

技術は知らない、ただ全力で拳を振り切ればいい。それだけで十分
「(SMASH!!!)」

圧倒的な破壊力を得られるのだから。

その拳を受けたOPヴィランは顔をヘコませ、身体中の関節を爆発させながら後ろへと倒れていった。そしてそのOPヴィランを破壊した出久は現在空中から真つ逆さまに落ちていた。

『身体制御』『思考加速』(やばいやばいやばいやばい!)」

身体制御を解除して思考加速に切り替えるが状況を変えうる一手にはなり得ず寧ろ落ちるまでの絶望の時間が先延ばしされただけだ。

「くっ…(左腕で下に向けて SMASHすればなんとか)」

しかしそうなった場合残った左腕すらも使い物にならなくなり合格は絶望的になる。だが、残された手段がこれしかないのもまた事実である。

「ああああああ!!!」

出久が左腕に力を込めようとした瞬間、横から平手打ちされた。そしてそのまま真っ逆さまに地面へ落ちるかと思いきや寸前で浮いたままになる。

「か、解除……！」

そして平手打ちした女子、転びかけていた時に助けてくれた女子が個性を解除すると同時に周囲に仮想ヴァイラン達と出久、そしてその女子が乗っていたヴァイランの部品らしき者が落ちた。

「(助かった……いや、助けられたんだ、あの人无事か？ とりあえず怪我はない……そんで、ありがとう!) ぐっづう、せめて、もう1Pだけでも!!?」

出久がほっとしたのも束の間、すぐ様まだ10Pしか取れてないことに気が付き動こうとするが試験が終了した。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼

一週間後、出久は魚と微笑みあっていた。

「出久……出久!?? ちょっと大丈夫? 何魚と微笑みあってたんの?!」

「ああ、ごめん、大丈夫」

筆記の方は大丈夫だろうけどそれを打ち消す10Pという余りにも頼りない点数。そして入試以降オールマイトと連絡がつかなくなった。ごめんなさいオールマイト、でも僕は正しいと思うことをしたんだよ。

「出いずいずく出久!」

慌てながら母が持ってきたのは雄英高校からの小さな封筒、通知だった。

△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼△△▼

渡された封筒を自分の部屋の勉強机に座りながら見つめる……いつまでも見つめていてもしょうがないので両手を使って思いつきり横へと引きちぎった。それと同時に中から出てきた機械が机へと落ちると同時に再生ボタンが押されたのかホログラムが再生される。

『私が投影された!』

「オールマイト!?!」

雄英から届いた物なのに何故オールマイトが？ という疑問は雄英に彼が勤めることになったと聞いて解消された。連絡が取れなくなったのもその関係で忙しかったかららしい。

『合否発表だが、筆記は取れていても実技は10P、当然不合格だ』
わかってた、わかってたけど、悔しい……！

『それだけならね』

『……？』

『私もまたエンターテイナー！こちらのVTRをどうぞ！』

そこで流れて来たのはあの時の女子が僕に自分のポイントを分けられないかと先生へ相談しているところだった。

『あの人せめてもう1Pって言うてて、せめて私のせいでロスした分……！』

『個性を得て尚君の行動は人を動かした』

『あの人、助けてくれたんです！』

『先の入試！ 見ていたのは敵Pのみにあらず！』

まさか、そんなことがあるのかと思わず椅子から立ち上がる。

『レスキューP、しかも審査制！ 我々雄英が見ていたもう一つの基礎能力！緑谷出久60P！ついでに麗日お茶子45P』

『む、むちやくちやだよ……！』

『合格だつてさ、来いよ緑谷少年、此処が君のヒーローアカデミアだ！』

堪えきれずに出て来た涙を拭って返事をした。

『はいっ！』